

looking above

透明人間たちの家

映画を通じて私たちは透明人間になった。
私にとって、身の周りのあらゆる実体は希薄化し、
私を取り巻く無数の他者にとっても、私個人の存在は透けているも同然である。

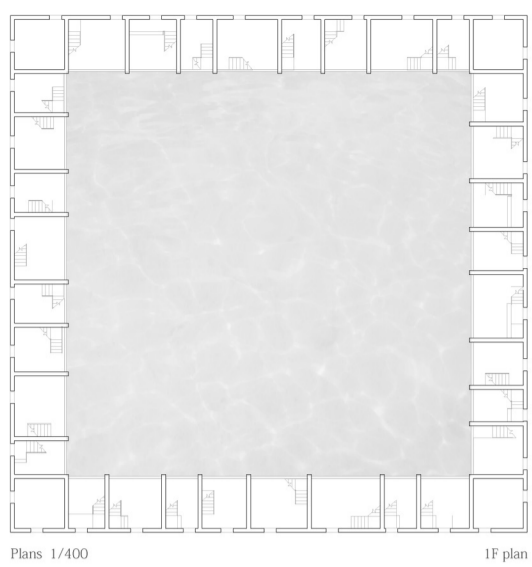
現実を映していたはずの映画という虚構は、現実をも飲み込んでいく。
たとえ現実世界においても、すべてが追体験、誰かのパロディであるような感覚。
現実もまた虚構になった。

いくつもの場所と時間を渡り歩いていく映画の感覚が、現実の日常生活にも重ねられるようになり、
この私という存在／この場所／今この瞬間が持っていた唯一性は消えていく。

自分にとって周りがありふれた虚構であり、周りにとっても自分は虚構であること。

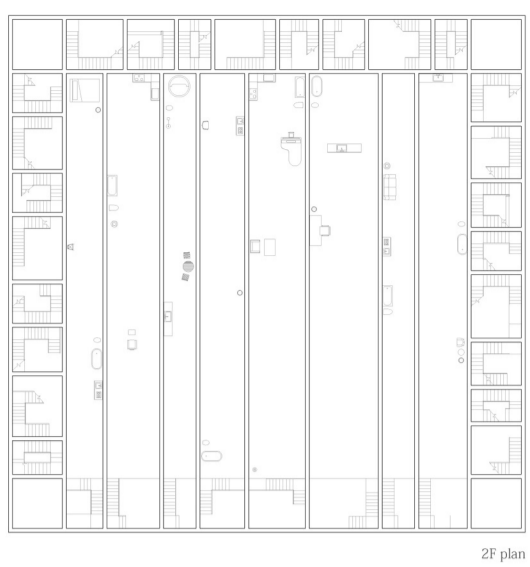
映画から生まれた、存在の希薄化した無数の透明人間たち。

この住宅は、そんな透明人間たちの家である。

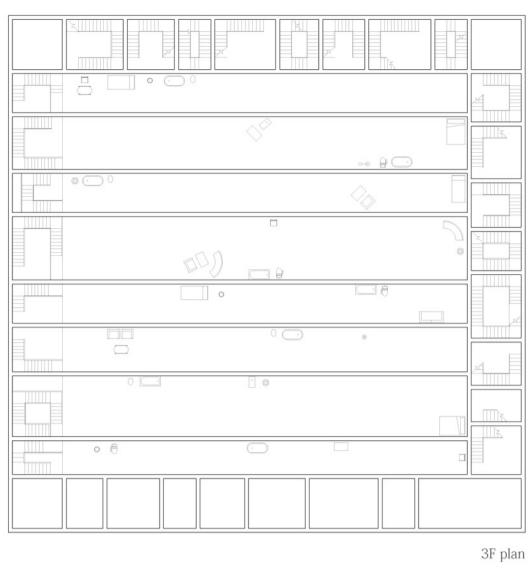


Plans 1/400

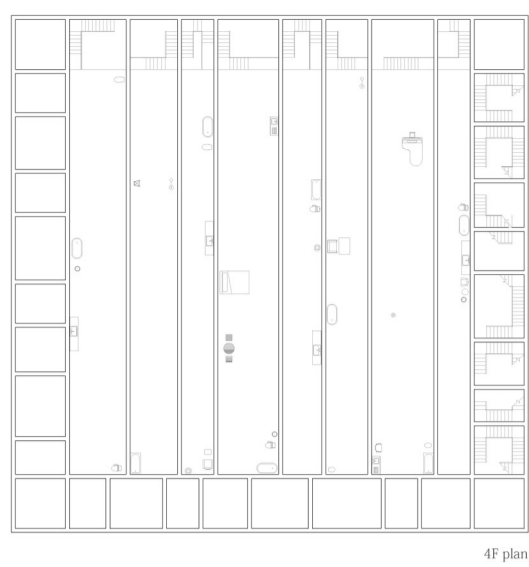
1F plan



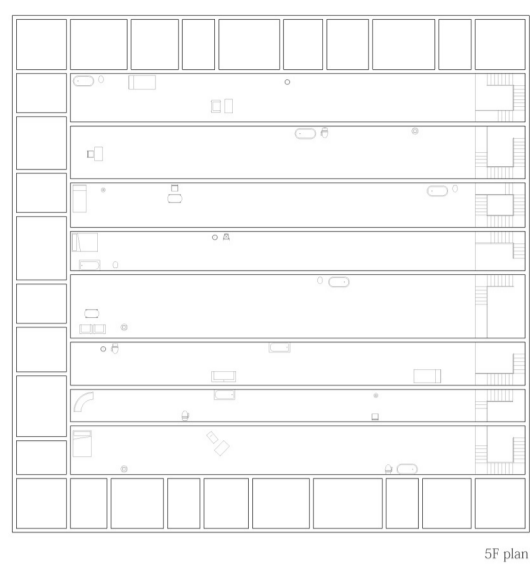
2F plan



3F plan



4F plan



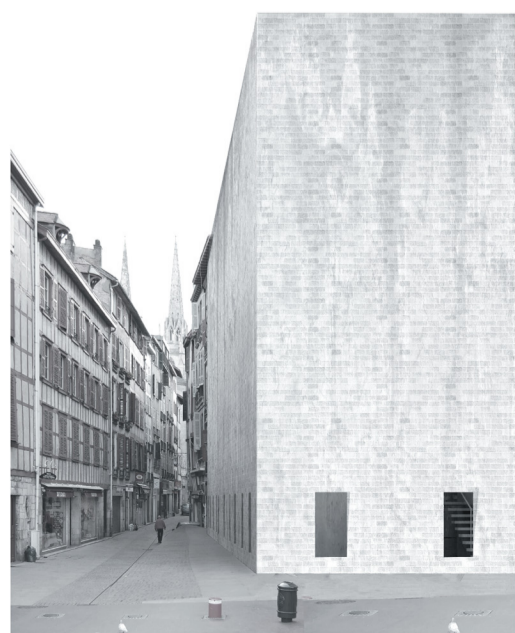
5F plan

この家は、天地を半透明なガラスに、左右を不透明な厚い壁に挟まれた細長い空間の集合体である。
 細長い部屋の上下を、無数の住戸が直交して通り抜けている。
 互いに言葉も交わさず、興味も示さず、生活の中で交わることなくすれ違う人々がその隣人である。
 隣人はその不特定性によって、個々の存在が希薄になり、
 同時に自分自身も、他者にとっては単なる無数の隣人の中の一人になり、存在が希薄化する。

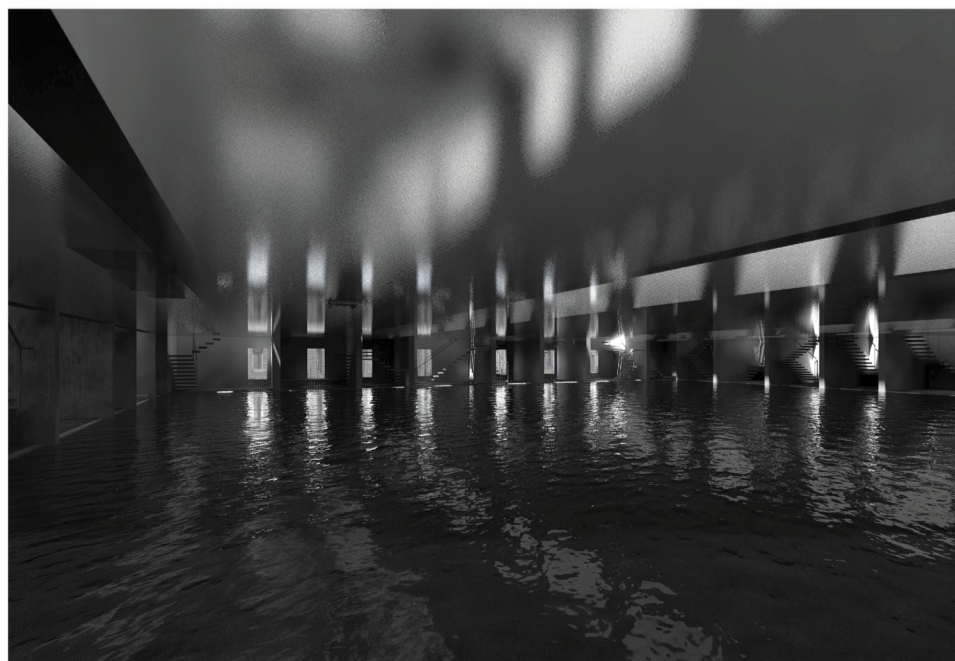
無数の無意味なものに囲まれているということ、それは一見するとデストピア的な世界観にも思えるが、
 透明な存在でいられることの心地よさを、現代の個人が帰りに求めているものではないだろうか。



Section perspective



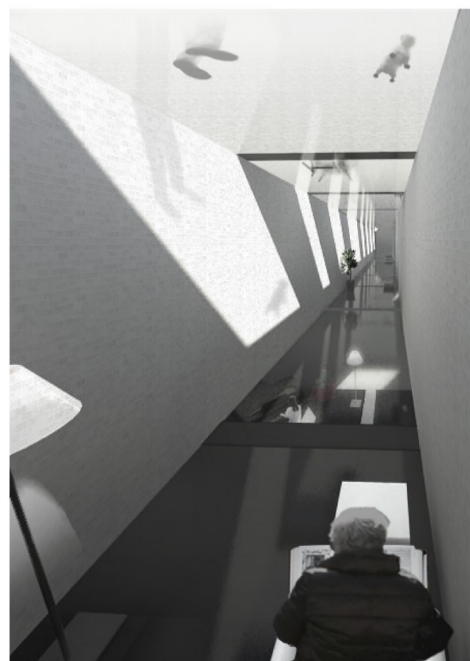
Facade



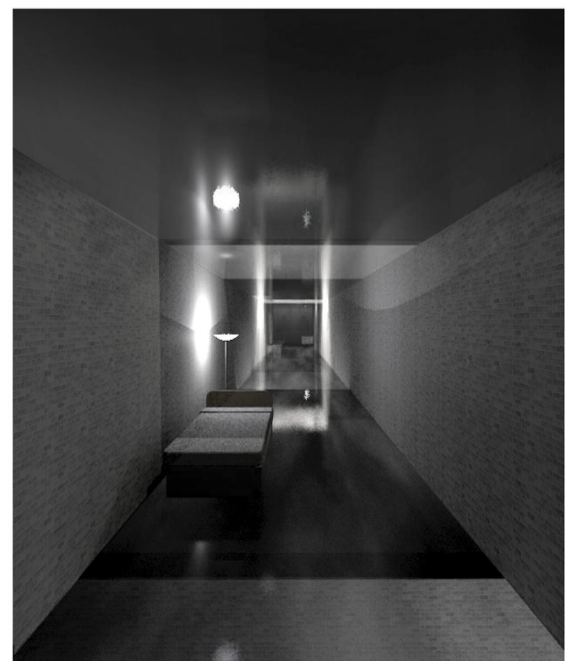
1F pool



2F



4F



3F night